京都橘大学女性歴史文化研究所　第二七回シンポジウム
「発信する皇女たち　―斎王を中心に―」Ⅱ

宣陽門院覲子内親王の夢

野田泰三

はじめに

榎村先生のご講演に対して、中世史の立場からコメント・関連報告をせよとのことなのですが、私は室町幕府や守護大名・戦国大名という、もっと後の時代を対象にしており、朝廷や皇女についてはほとんど研究したことがありません。

これは困ったと思ったのですが、いまを去ること四半世紀前の大学院生のとき、五年間ほど東寺でアルバイトをしていました。境内の北の端にある宝物館で、古文書の整理やデータ入力などをしていました。その際展示室を通るのですが、一角には非常に美しいミニチュアの五重塔が展示されていました。

この五重塔は、高さが一六〇センチ、人の身丈ほどの非常に精巧な五重小塔です。いつも「きれいだな。精巧なものだな」と思いながら見ていたのですが、実はこれを造らせて東寺に寄進したのが、今日お話しする宣陽門院という皇女です。

宣陽門院は、平安末期から鎌倉前期にかけて生きた皇女で、東寺や高野山に荘園を寄進しています。彼女が荘園を寄進したおかげで、それまで経済的に非常に困窮していた東寺が一時、持ち直します。その意味で、東寺にとって宣陽門院という方は非常に大切な存在ですし、私が扱える皇女といえばこの方ぐらいしかありませんので(笑)、今日は宣陽門院覲子内親王についてお話しさせていただいて責をふさぎたいと思います。

一、古代・中世の日本人と夢

榎村先生のお話の最後に出てきましたように、古代・中世の日本人は非常によく夢を見ます。これは天皇・皇女や公家に限ったことでは

なく、一般庶民もよく夢を見ます。しかも、現代人の夢は「個人の願望や内面が無意識のうちに夢にあらわれる」と言いますが、古代・中世の夢は神仏からのお告げ・予言として受けとめられていました。日記や古文書、文学作品や絵巻物など、様々な史料に夢の場面や記述が出てきます。「御霊夢」とか「御夢想」という言葉が古代・中世の史料には頻出しますが、昔の人は非常によく夢を見て、かつ、それを記録しています。

なかでも有名なのは、鎌倉時代の僧侶明恵高弁の「夢記」です。明恵上人は、京都の北西、栂尾の高山寺で修行して、高山寺の中興と称される徳の高い僧侶ですが、この方は自分の見たたくさんの夢を克明に記録しています。

近代ヨーロッパではジークムント・フロイト(一八五六～一九三九)が夢の分析をしたことで著名ですが、日本ではすでにその六百年以上前に夢の記録が取られており、かつ明恵はその夢の意味を自己分析すらしていたのです。

また、源平合戦のときに平敦盛を討ちとったことで有名な熊谷直実はのちに出家して蓮生坊と名乗りますが、この人も来世では上品上生に往生するという夢を見て、それを記録に残しています。

このように、古代・中世の日本では夢の記録が盛んにつくられました。

夢を見るための作法や装置もありました。一般的なのは仏寺のお堂に参籠して一晩、お籠り(通夜)をすることです。仏前で一晩過ごすことによって仏から夢のお告げを得る。有名なのは清水寺の観世音菩薩ですが、烏丸高辻下ルの因幡堂(平等寺)の薬師如来も、霊験あらたかな仏様として中世にはよく知られていました。

これらのお堂は、人びとがおこもりできるように、仏前に広いスペースがもうけられています。古くは奈良法隆寺の夢殿は、聖徳太子が夢のお告げを得るために籠る建物だったとも言われています。夢見をする装置や作法ができあがっていたのです。

さらに、見た夢を解釈する夢合わせや夢解きも盛んにおこなわれました。

中世の日本人と夢の関わりについては酒井紀美氏が研究されています。『夢語り・夢解きの中世』(朝日新聞社、二〇〇一年)や『夢の日本史』(勉誠出版、二〇一七年)などのご本でいろいろお書きになっていますので、ご関心をお持ちの方はごらんください。

宣陽門院覲子内親王という方も、よく夢を見ました。記録類を見ていますと、霊的な感応をしばしば受ける人のように見受けられますが、それがまた社会に様々な影響を与えていたということをお話ししたいと思います。

二、宣陽門院覲子内親王

宣陽門院は、平安末期の養和元(一一八一)年に生まれて、鎌倉時代半ばの建長四(一二五二)年に七二歳で亡くなるまで、比較的長生きをした女性です。父親は平安末期、源平両勢力を手玉に取った後白河法皇で、母親は後白河に愛された丹後局(高階栄子)です。高階栄子は、

後白河法皇が平清盛によって幽閉されたとき後白河に近侍しており、以後、後白河に非常に寵愛されることになります。「朝務は偏えにかの唇吻にあり」と言われたように、政治上も大きな影響力を持った女性で、この二人の間に生まれたのが覲子内親王です。

父法皇から非常に愛された覲子内親王は、九歳で内親王宣下を受け、准三宮という名誉称号を賜りました。さらに、わずか一一歳にして宣陽門院という院号を宣下されたということも、父親から非常に愛されていたことの証だろうと思います。同時に、母親の高階栄子は従二位に上っています。

さらにその翌年、父法皇から長講堂領という膨大な荘園群を譲られています。現在、下京区富小路五条下ルに長講堂というお寺が残っています。現在は浄土宗西山派のお寺ですが、もともとこの一帯は六条殿と呼ばれ、後白河の御所のひとつでした。この六条殿を後に宣陽門院が譲られるのですが、後白河法皇が六条殿のなかに設けた持仏堂が「長講堂」でした。

この時代、上皇・法皇がつくる寺院は天皇家財産の受け皿になっていて、長講堂には後白河法皇の権力を期待するさまざまな人びとから数多くの荘園が寄進されました。長講堂ができた直後の建久二(一一九一)年にその所領を書き上げた目録を見ますと、京都近辺では下桂庄や伏見などが、また、丹波の弓削庄(京都市右京区)や、野口牧(京都府南丹市)など、全国四二カ国で八九の荘園が書き上げられています。これらの荘園から進納されるのは、米が五千三百石余り、絹が千二百疋余り等々という莫大な収入源となっていて、これを宣陽門院は一二歳のときに父法皇から譲られました。

榎村先生のお話にもありましたように、平安後期から鎌倉期にかけての皇女は、このような膨大な天皇家領荘園を受け継いでいくという機能を果していました。榎村先生のレジュメの最後にある八条院領は、鳥羽天皇の娘の八条院が受け継いだ荘園群で、二百二十カ所ありました。鎌倉時代後期、天皇家が持明院統と大覚寺統の二流に割れて皇位を争いますが、長講堂領は持明院統の経済基盤となり、八条院領は後嵯峨天皇や後醍醐天皇など大覚寺統の財源として受け継がれていきます。

宣陽門院は、建久六(一一九五)年には東大寺大仏供養参列のために上洛した源頼朝とも対面していますが、二五歳のときに髪を下ろし、その後は仏事をもっぱらとする生活を送ったようです。建長四(一二五二)年に伏見で亡くなっています。伏見桃山城があった桃山の南に即成院というお寺がありますが、ここは宣陽門院が再興したお寺です。阿弥陀如来像を中心に、二十五体の菩薩像が来迎引接(死者を極楽浄土へ迎えとること)する様をあらわしていることで知られています。ここに門院のお墓があります。

三、宣陽門院と醍醐寺

宣陽門院の宗教面での活動に目を向けますと、建保四(一二一六)年、彼女が三六歳のときに、高野山の蓮華乗院へ阿波宍咋庄(徳島県海陽町)を寄進しています。蓮華乗院は、彼女のおばにあたる頌子内親王

が父の鳥羽上皇を弔うために建てたお寺で、歌人として有名な西行法師が勧進（資金集め）をしました。

承久元（一二一九）年には醍醐寺に阿弥陀院を建て、翌年には高野山の奥院へ三粒の仏舎利を寄進、嘉禄三（一二二七）年には醍醐寺に南禅院を建立しています。

いま申しましたように、醍醐寺には、阿弥陀院と南禅院を造営していますが、いずれも成賢という僧侶の仲介をもって成した事業です。成賢は、おじが醍醐寺の覚洞院勝賢という高名な僧で、その縁で醍醐寺三宝院に入り、長じて三宝院主、さらに醍醐寺のトップである座主の地位に就きます。醍醐寺は当時の真言宗世界の有力寺院で、東寺長者を輩出しています。東寺は真言宗の根本道場、つまり総本山的な位置づけで、長者は一長者から四長者まで四人いました。成賢はその東寺の三長者の地位にまで上りつめました。

彼は、孔雀経法や請雨経法などの祈禱によってその実力を認められ、後鳥羽院の帰依を受けてその護持僧になるという、仏教界でも非常に成功した人物と言うことができます。

実はこの成賢とも関わるのですが、宣陽門院は若い頃、魂が体から脱けだすという体験をしています。これは成賢の孫弟子にあたる賢深に対して門院本人が語っていて、賢深が記した『報物集』（醍醐寺蔵）という史料のなかにその話が出ています。阿部美香氏が『報物集』を翻刻して、現代語訳を付けてくださっていますので、以下に紹介させていただきます（阿部美香「醍醐寺焔魔王堂建立の深層―宣陽門院の脱魂体験をめぐって―」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』四四、二〇一七年）。

御所六条殿（宣陽門院）御物語に云わく、予十七の御年、予が魂の出たりしなり。（私は一七歳のときに魂が抜け出る経験をしました）

続けて現代語訳の部分をご参照下さい。

ある夜、寝入っていると、夢見心地に私の身体の皮がむけて、中身だけになったように覚え、しかも壁を伝い這うような痛みを感じた。ふと目があけて見てみると、黄金色に輝く丸いものが壁にそって二〇度ばかり上ったり下がったりした。夢か現かと思ってよく見てみると、それは私の魂だった。周りで寝ていたお付きの女房たちを起こすと、別当三位は寝ぼけて、そばの障子を開けてしまったので、魂が外に飛んで出た。

それ以降、私は虚脱したようになって、身体に力が入らずに寝たり起きたりという生活をしていたけれども、その頃、仁和寺の守覚法親王（宣陽門院の異母兄）が私のもとを訪れた。「どうされたのか」と問われたので、事情を説明したところ、驚いて、そのあとすぐに祈禱を始められた。

それから七日ほど過ぎて、また夢を見た。夢の中で、私は衣だけを着て臥していたところに、背の高い僧侶があらわれた（これが守覚法親王です）。少納言という女房を呼び、門院の衣が盗まれてしまったのだと告げ、少納言にそれを探して来るようにと命じて、なんとか女房が尋ね出してきてくれた。女房が持参した白い衣を見てみると、四丈ばかりがほどかれて、ばらけた状態になっ

ていたけれども、四丈はほどかれていなかった。私がそれを受け取って、衣の懐に入れたところで目が覚めた。

『報物集』には、このような顚末が書かれています。実は、この取り戻して懐に入れた衣こそ門院の魂であったのです。

病床に臥す門院のもとを訪ねた異母兄・守覚法親王は、事情を聞くと延命招魂作法という祈禱をおこない、その秘法の験があって、門院は七日目に正気に戻ることができた、というのがこの話のオチです。守覚法親王は、成賢のおじであり師であった覚洞院勝賢から延命修法を伝授されていました。

秘法中の秘法とされる延命招魂作法は、勝賢から成賢にも伝授されていました。成賢も、守覚法親王と同様、非常に験のすぐれた僧侶でした。成賢がおこなった祈禱・修法を書き上げた「遍智院御勤仕御修法等目録」（醍醐寺蔵）には六六件の修法が書かれています。そのなかで宣陽門院の要請による修法として、後鳥羽院の三六件に次いで多い一三件がみえ、宣陽門院が成賢に深く帰依し、成賢も宣陽門院に奉仕していたことがうかがえます。

このように、きわめて繊細な心の持ち主であったと思われる宣陽門院ですが、後にまた別の夢を見まして、その夢が醍醐寺に焔魔王堂を建てることにつながります。

宣陽門院は貞応二（一二二三）年、醍醐寺に焔魔王堂という堂舎を建立します。現在、三宝院など醍醐寺の主要伽藍は山の下の下醍醐にありますが、もともとは山の上の上醍醐が中心でした。現在、下醍醐から上醍醐にかかる登り口のところに、女人堂というお堂がありますが、焔魔王堂はそのあたりにあったようです。

宣陽門院の夢に亡母・丹後局があらわれ、「責められ助かるべき術無きなり。千手を祈り申さるべきの由ご覧ぜらるの間、法皇御本尊の千手を先師僧正（成賢）に借り渡さるべし」（私は地獄で責められ、往生できないでいる。千手観音を祈れと教えられたので、どうか後白河法皇が持っていた御本尊の千手観音を成賢に渡して祈禱してもらって欲しい）と告げた（『幸心抄』巻第一）。この夢を契機に、宣陽門院は焔魔王堂を建立することになりました。

焔魔王堂については、成賢が残した記録「焔魔王堂絵銘」（国立歴史民俗博物館蔵）により、どういう建物であったのかがわかります。本尊は、当時一流の仏師だった快慶と湛慶が造った焔魔大王や泰山府君など、いわゆる冥府の仏たちが祀られていて、堂の内側の壁には、天竺・震旦・日本のさまざまな地獄図が描かれていました。

同時代に作成された『地獄草紙』をみると、様々な地獄の様相が描かれています。例えば、火象地獄は火の中で象に責めさいなまれる図であり、剝肉地獄は体の皮を剝がれる図です。こういう地獄図が、この時代に盛んにつくられましたが、焔魔王堂の内壁にも描かれていたわけです。

お堂の外側には九相図が描かれていました。九相図とは、美しい女性が亡くなって、その身体が腐敗し、烏や犬についばまれて骨だけになり、それが焼かれて最後には土になる、という九段階の様相を描いたものです。昔の人びとは、このような図を見て、死後の世界に思い

をいたし、いかに往生すべきかを考えたのです。

内壁の地獄図は、死後に焔魔王の裁きを受けるときに備えて、ふだんから極楽往生を願い、善行を積んだり仏道修行に励むことを促すための図であり、外壁の九相図は、美しい女性が醜く腐っていき、最後は土に還る図ですので、女人教化、つまり女性が往生するためにはどういうことが必要かを考えさせるための図で、あえてそれらをお堂の内と外に配置したわけです。

ちなみに、成賢は、醍醐寺の座主が代々引き継いできた勝倶胝院を、自身の後世菩提を弔うための念仏道場と定めたうえで、死の直前、寛喜三(一二三一)年に自分の弟子僧ではなく真阿という尼に譲渡します。以後、勝倶胝院は、女性(尼)が受け継ぐ寺となり、鎌倉時代には寄る辺なき女性や親や子に死に別れて行き場のなくなった女性たちが集って、不断念仏を行ずる尼寺となります。

このように見てまいりますと、醍醐寺では、宣陽門院と、門院との太いパイプでつながれた成賢によって、焔魔王堂や勝倶胝院といった女人救済・女人往生のための堂舎が整備され、女人救済の場が出来あがっていったと考えることができます。

四、宣陽門院の弘法大師信仰

宣陽門院は五〇歳を超えたあたりから東寺との関係を深めていくようです。天福元(一二三三)年、彼女が五三歳のとき、東寺長者である親厳の宿願として、弘法大師空海の木像(康勝作)が造られ、西院不動堂に安置されました。翌年の弘法大師四〇〇年遠忌を前にしてのことでした。

東寺の講堂には、空海が唐から持ち帰った二十数体の密教仏が祀られています。この空間は、鎮護国家の祈禱をする場です。一方、境内の北西部、築地塀に囲まれた一角には、御影堂(真言宗では「みえどう」と読みます)があります。この区画は西院と呼ばれ、弘法大師空海を祀るスペースとなっています。ここは鎌倉時代以降、庶民による弘法大師信仰の場となります。いまでも空海の命日にあたる毎月二十一日は「弘法さん」として多くの参拝者が訪れますが、そのルーツは鎌倉時代にまで遡るのです。

西院不動堂に空海像が安置された五年後、嘉禎四(一二三八)年五月、門院は東寺四長者であった仁和寺菩提院の行遍から伝法灌頂を受け、翌暦仁二(一二三九)年には、大和平野殿庄(奈良県平群町)という荘園を行遍に寄付し、さらに同年末には、瀬戸内海の伊予弓削島庄(愛媛県上島町)も東寺に寄付します。

翌延応二(一二四〇)年の三月二十一日(空海の正忌日)には、それまで堂の南側に祀られていた空海像が北に移され、御影供(みえく)が始まります。冒頭にお話しした五重小塔を宣陽門院が東寺に寄進したのはその月の晦日のことです。五重小塔には東寺に伝来した三粒の仏舎利が納められており、以後、東寺では毎月、舎利講という法要が営まれるようになります。

宣陽門院は、その後も、空海が中国から持ち帰った健陀穀子(けんだこくし)袈裟を修繕したり、大般若経や宋版一切経、釈迦如来像や弥

勒菩薩像を寄進しています。仁治三(一二四二)年には、安芸後三条院勅旨田(広島県)を東寺に寄付するなど、さまざまな経済的援助をし、東寺の整備に多大な貢献をしました。

寛元元(一二四三)年四月には、また「御霊夢」のお告げを得て、東寺で長日生身供を始めることになります。これは、先ほどお話しした御影堂の空海像に対して毎朝夕に食事を供える儀式で、現在も続いていますが、これが門院の発願として始まります。その費用を捻出するために備前鳥取庄(岡山県赤磐市)や丹波野口庄(京都府南丹市)という荘園があてられました。

寛元元(一二四三)年四月二十二日付の宣陽門院令旨案(東寺文書)には「御霊夢の子細有るにより」という文言が見えますし、文和二(一三五三)年十一月二十六日東寺申状案(東寺文書)にも「宣陽門院御霊夢の子細有るにより」という文言があり、宣陽門院の霊夢によってこれらの行事が始まったことがわかります。

このように、歳を重ねた門院は、東寺、あるいは弘法大師に対する信仰を深めていきますが、そのきっかけとなったのが、菩提院行遍という仁和寺の僧侶です。彼は、醍醐源氏の出自で、父の仁尊は守覚法親王に仕える人物でした。守覚法親王は門院の異母兄で、門院が魂が身体から出ていくという体験をしたときに祈禱してくれた人です。

行遍ははじめ仁和寺菩提院の行宴のもとで修行していたのですが、容色にすぐれていたため、仁和寺御室であった道法法親王に仕えることになります。道法は、守覚法親王の弟にあたる人物です。行遍は才能を見いだされて、仁和寺のなかで出頭していくことになります。

成賢にせよ、行遍にせよ、いずれも宣陽門院の異母兄である守覚法親王や道法法親王と関係の深い人物です。また、先に述べた宣陽門院による高野山蓮乗院への宍咋庄寄進や、同奥院への仏舎利施入も行遍が仲介したものでした。

そうしますと、宣陽門院の発願を仁和寺の行遍という僧が実現することによって、東寺西院御影堂が整備されたり、現在まで続く御影供や舎利講といった東寺の重要な行事が始まったと言うことができるでしょう。

鎌倉時代前期における宣陽門院の寄進を基にした諸行事の整備を受けて、弘法大師空海個人を対象とする信仰が広がり、現在にまで至る弘法大師信仰の基礎がこの時代に築かれたと言えると思います。

宣陽門院は、後白河法皇が愛してやまなかった娘ですが、守覚法親王・道法法親王という仁和寺のトップ、言い換えれば真言宗世界では最高の血筋と実力を持った人びとをきょうだいに持ち、また、その弟子筋の成賢や行遍らとも太いパイプを有していました。

このような当代一流の僧侶とのコネクションと、父後白河院から受け継いだ膨大な財産を背景にして、高野山や東寺といった寺院の伽藍や修法・法会の整備を進めていく。それが結果的に、女人救済(男性より極楽往生が難しいと考えられていた女性のあの世での救済)、あるいは京都周辺住民の現世利益・後世菩提を叶えたいという弘法大師信仰を伸張させることに寄与したのではないか。

もちろん、これは結果的にということですが、宣陽門院とその夢想が女性の救済や弘法大師信仰が拡大していく契機となったと言えるのではないか。榎村先生のお話にあえて引きつけますと、当該期にも、皇女による社会的な発信がなされていたと言えるのではないでしょうか。

以上、雑駁な話で恐縮ではございますが、榎村先生のご講演に対するコメントに代えさせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。（拍手）